

1 八百津高校の歴史と体験学習のねらい

昭和18年、八百津高等女学校として創立し、戦後、県立高等学校に移管し、八百津町の中心地に幼小中高と並立していた。昭和63年に中心部から1kmほど南西で名鉄八百津駅の近くにある、標高差80m（階段数390段）の「原山」に移転し、同時に体育コースが設置された。

移転前には、町内の中学生の6割を超える入学生を迎えていたが、移転後「町の高等学校」の姿は徐々に消え、地元出身者が2割を割り込む時もあった。志願者が入学定員を大きく割り込み、授業の成立も困難な状況が続いた。そこで「生徒と向き合って、きめ細かな指導をする」教育活動をすすめてきた。その努力が少しずつ実り、現在落ち着きを取り戻しつつある。しかし、基礎学力の回復と同時に、自己の存在感を肯定的にとらえ、社会的な存在としての自信を取り戻していくことは重要な課題である。この課題に取り組むために、地域の教育力を取り入れた体験学習の検討を進めてきた。まさにその時期に、文部科学省の「豊かな体験活動推進事業」の指定を受けることになった。また、本校では総合的な学習の時間の本格実施を前に、その内容を検討しつつ先行実施していた。体験学習は、総合的な学習の時間として1単位を教育課程上に位置付け、年間35単位時間の体験活動を進めてきた。

2 学校支援委員会の組織と援助

岐阜県では、学校評議員会制度が導入されており、学校外の人々の声を教育活動に生かしてきた。学校支援委員会は学校評議員を中心に構成され、年2回開催された。以下紹介する活動について、学校支援委員の援助とアドバイスを受け、各事業を推進していくことができた。支援委員のみならず、支援委員の地域での繋がりの中で、様々な人々の応援が広がっていき、「豊かな体験活動」の名に相応しい事業にしていけることができた。

3 岐阜県立高校農園クラブ設置事業を取り入れて

- (1) 岐阜県では、昨年度より「地域の身近な自然環境の中で、農作物の育成についての体験的、継続的な学習活動を通じて、土に触れ、汗を流すことのさわやかさ、作物の生長や収穫の喜びを経験させ、生命や自然、食料の大切さを学ぶとともに、豊かな人間性や望ましい勤労観を育成する」ことを目的とした、岐阜県立高校農園クラブ設置事業が始まった。

岐阜県内の年度別実施状況（県内高校数74校中）

	13年度	14年度	15年度予定
学校数	27校	58校	74校

- ・作付け面積 565.2a、平均9.7a
- ・参加生徒数 11,437人

- (2) 「地域の人々とふれあう教育の実践」を追求してきた本校でも、平成14年度からこの事業に参加することになった。

体験場所の確保

地域の人々や支援委員の応援を受けて、町内の休耕地や畑4カ所の提供の申し出があった。日常の管理や協力の申し出もあった。地域の人々の本校への熱い思いが伝わってきた。





さつまいもと大豆

借り受けた約5アールの畑の三分の二に、さつまいもの苗400本を植えた。体験前に県農業指導員から、さつまいもの種類、畝の作り方、植え付け方、肥料のやりかた等の講義を学校で受けた。現地では農協職員、地主さんの実地指導もあり、地域の人々とのふれあいのなかで体験することができた。

また、校内で発泡スチロールの箱に大豆の種を蒔き、苗を育て、2週間後にその苗を三分の一の畑に移植した。その際にも畑に移植する時期やその方法など農協の職員の指導を受け、単なる作業に終わらず、様々な工夫を学ぶことができた。

真夏の草取り

さつまいものツルが伸びてくるまで、雑草除去に取り組んだ。除草は苗の植え付けや、収穫とは異なり、農業体験の中では一番喜びが少なく地道な作業である。夏休み前の炎天下、生徒は草取りに励んだ。家庭でも農作業を手伝っている生徒は手際良く作業し、あまり経験のない生徒は、それを見習いながらさわやかな汗を流した。このような生徒の農業体験の姿に触発されて、早朝あるいは夏休みに除草する職員もいた。

さつまいもの収穫

さつまいもの収穫では、八百津保育園の園児42名を招待して、いも掘りを実施した。本校の生徒が途中までさつまいもを掘り、園児自身の力で大きなさつまいもを掘る経験させていた。また、地元の中学校から「ドラム缶を改良した芋焼き器」を借りてきた。それで、園児と一緒に焼き芋をつくり、園児と一緒に試食した。また、文化祭において生徒全員で食べたり、家庭に持ち帰ったりした。やはり、自分の手で栽培したさつまいもはおいしく感じられた。また、収穫した大豆については地元婦人会の指導を受けて豆腐作りに挑戦する予定である。



4 地域の教育力を生かした本校独自の体験学習

(1) 「地域教育力活用委員会」の発足

昨年度、地域体験学習を具体化するために「地域教育力活用委員会」が発足した。若い教師と経験豊富な教師で構成された。教師の発想は多感で柔軟性に富み、生徒の現状を踏まえた案が出された。具体化していくエネルギーも高く、論議の中で出された意見は、学校長の励ましを得て、具体化、実現化していった。

(2) 「地域」「体験」をキーワードにした体験学習を進めるに当たっての学習会

昨年度、高等学校の統合の動きもあり、小規模校である本校はその対象であると噂された。同時期に生徒の通学の中心であった「名鉄八百津線」が廃線となった。職員は八百津高校存続に危機感をもった。



学校改革の一つの柱となる「地域体験学習」に勢いをつけ内容を充実させるために、「住民参加の地域おこし」を各地で手がけている、岐阜女子大学の助教授を講師に招き学習会を実施した。「八百津生き生きネットワーク」と銘打って、本校職員だけでなく、八百津町役場の4つの課、地元中学校長、本校PTA役員にも参加してもらった。

「危機意識がエネルギーとなる」という助教授の実践に裏打ちされた講演は、参加者に町おこし、学校改革の励ましとなった。参加者からは広い視野からの発言があり、これから取り組む「体験学習」の意義と内容を深めるこ

とができた学習会となった。

(3) 地域チャレンジ講座のとりくみ

体験先発掘の苦労

1、2年生全員が体験する企画となったが、体験先の発掘は「地域教育力活用委員」が中心となって、地域の企業、福祉施設、保育園、陶芸教室など、あらゆる可能性のある所に出かけ依頼した。学校支援委員の応援も受けて体験先を36箇所確保することができた。

事前の取り組み

チャレンジ講座に参加する1、2年生には、12月からその意義について話してきた。「栞」を作成し、生徒に常時持たせて事前学習に役立たせてきた。1月には体験先へ事前のお願いに伺うために、電話での確認も実施した。生徒の極端に緊張して電話する様子



をみて、この企画の成功を確信した。

地域チャレンジ講座の実施

1日だけの体験学習であったが、初めて出会う人々とのふれあい体験で、生徒は今までにない緊張と様々な感想をもった。教師以外の人々に直接評価され、あるいは注意された。同じような事を教師が指摘するよりも、違った教育効果があったことが、感想文の中から感じられた。

体験のまとめと発表

各自が体験をまとめ、代表者が体育館で発表する。人前で話すことが苦手だけでなく、人前に立つことも嫌う生徒が多い中で、ステージでの発表が本当にできるのかという当初の不安を一掃し、代表者はみごとに自分の言葉で体験談と感想を発表した。

その後、体験先ごとに、写真を取り入れてまとめを2部作成し、校内と八百津町ファミリーセンターに掲示した。体験先での温かい励ましの言葉は生徒に大きな自信を与え、人々との触れ合いの中での実体験によって、生徒の感想文やまとめは形どおりのものではなく、生き生きとした表現で豊かな内容にまとめられていた。



体験先からの評価と感想を生かして変革の推進を

体験先から各生徒の評価と全体の感想を送ってもらった。その感想は生徒がまじめに取

り組んだことなど、多くは高い評価を受けた。一部で「服装の乱れ」「時間どおりきびきび動かない」などの点での苦言もあったので、事後適切に指導した。また、地域の人々とのふれあいを通じた体験が生徒に大きな影響力をもつと、教師自身が学ぶことができた。

5 本校独自の地域における豊かな体験活動の推進

(1) 地域の人々に感謝し、地域の人々とともに作り出す環境作り

中学生と環境問題の協働体験学習

8月の八百津町の「花火大会」の翌朝、地元2中学の生徒と本校の1年生の生徒で、町内の清掃活動を行った。町商工会関係者、役場の職員等と一緒にになって午前中の活動となった。華やかな「花火大会」の裏には、多くのボランティアの支えがあって成立していることを生徒は実感した。午後からは、ゴミの焼却場「ささゆりクリーンパーク」の見学と、廃物利用のガラス工芸を体験した。



地元老人会と一緒に通学路清掃体験活動

通学路清掃活動を検討していた時に、岐阜県道路維持課の県道清掃ボランティア活動

「ぎふロード・プレーヤー」事業を八百津町役場から紹介された。この事業に参加し、物



心両面の支援を受け、この計画を具体化した。八百津高校の清掃管理区間として県道の一定区間を受け持ち、除草・清掃活動を年間5回実施してきた。4回目の清掃体験活動では、地元老人会の人々と一緒に実施した。地域の人々と触れ合い、お年寄りが休む暇なく動き回っている姿を見た生徒は、前回までの清掃活動よりも熱心に取り組み、老人会の人たちの指示や注意を素直に聞き入れ、活動に励んでいた。

6 活動の成果と今後の課題

13年度の「地域チャレンジ講座」の取り組みは、14年度の岐阜県立高校農園クラブ設置事業の成功につながり、様々な体験学習への広がりを作り出していった。14年度の「地域チャレンジ講座」は2月5～7日の3日間で実施された。現在、そのまとめを作成中であるが、事前のテーマ作り、3日間の取り組みの意気込み、事後の体験発表会など、教師の予想をはるかに上回る成果を作り上げた。

この一年間の体験学習を通して、生徒の持つ可能性について教師が多く学んだ。また、地域の人々と触れ合う企画を取り入れることの大切さも学んだ。地域の人々が本校の教育を真剣に考え、熱心に協力してくれる姿に全職員が胸を熱くした。とかく閉鎖的で、狭い範囲で生徒をとらえがちな教師の姿勢を反省する機会になった。

様々な体験学習の中で見せてくれた生徒の意欲的な面を、普段の教育活動の中に生かし、さらに地域の教育力をもっと積極的に取り入れていく企画を検討していきたい。また、教師が地域に出かけ教師自身が学ぶことも追求していきたい。

今後の大きな課題は、評価の問題である。様々な体験活動の自己評価や地域の人々の評価などを総合的に判断して評価する方法の工夫が必要である。また、体験学習の時間と授業時間のバランスをどのようにとり時間割をどう組むのが今後の検討課題である。